

調査日 群馬県森林組合販売担当者会議 5月13日

群馬県の森林組合の販売担当者が一堂に集まり、現在の需要動向の説明や各組合の実績報告を聞く中で、ウッドショック以来の木材の流れが見えてきた。

世界的な木材逼迫の中で、輸入材に依存していた我が国内の情勢は、当然国産材に期待が向く訳であるが、外材には無い生産管理の難しさから需要に応えられていない実情が浮き彫りになる。需要者側の逼迫感は深刻であり、木材に代わる材料を模索し始めている。今は国産木材の価値を知らしめる好機であり、長年の県産材の認識を好転させるチャンスに違いは無いのだが、その好機を逃し始めていると思える。

県森連の第2工場構想は、これに応えるものであり、これを支えるには現在県内の森林組合で、生産量第3位の烏川流域森林組合の躍進がカギとなるだろう。

生産量第3位と言っても、1位の吾妻森林組合とは3倍の差がある。我が組合との違いは、外注の多さにある。組合の直営量はそれほど大きな差は無いと思われる。

外注はそれなりに問題があり、現場管理が難しい事から外注しない組合もある吾妻森林組合は、下請け業者に対して組合並みの現場管理を徹底させる事に成功している。この事がこれからの業績拡大のポイントだろう。

調査日 県森連木材共販所 5月18日

今回は主力のスギの3m柱材にまとまった物件が無く、むしろ4.0mが多かった。ヒノキが多かったためと思われる。

その他、スギ・ヒノキ共に年数の入った大径木が出品されていた。特にヒノキは高値が付き、久しぶりに@30,000円を超える値を見た。スギの大径木もあまり目荒で無く、まあまあ良い木であったが、@16,000円前後と、一般の中目材の値だったので使い道は板材などであろう。大型工場に無い能力、何でも挽ける従来型の工場も、残って行ってほしい。

調査日 素材生産協同組合 5月19日

今回は”新緑祭り市”と銘打って行われた。

出品されている物は、広葉樹が多い事から、前橋とは少し買い方の顔ぶれが違う。但し広葉樹は大量消費するものではないため、物件数が多くても使えそうな物だけがパラパラと売れる程度。ただ今回は新規物件が多くて面白い物が売れていた。

針葉樹も特別市らしく、1本売りの大径木が出ていたが、こちらはあまり人気が無かった。県森連の大径木と違って太いだけの物で欠陥も散見されたので一般用にも使えない。山林の木では無く、屋敷木か、あるいは林分の端木だった様だ。